
奇跡の正しい使い方

二模羽作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の正しい使い方

【Zコード】

Z0084Y

【作者名】

一模羽作

【あらすじ】

古代数秘学者、ピタゴラスは言った。「世界の全ては数でできている」と。

古代物理学者、デモクリスは言った。「世界の全ては原子でできている」と。

そんな世界で彼、阿智良 アチラミナト 湊ツカが出会ったのは、屋盛 ヤモリヤカネ 茜アキという

【奇跡】を使用した人物だった。

彼女の行いは、オリエントと世界を巻き込む崩壊の起爆剤だった。

エブリスタの汚点を修正して展開、設定を変更しての投稿となります。エブリスタのほうでも同じタイトルです。処女作という事で出来は悪いですが楽しんでいただけると嬉しいです。

オリント戦地（前書き）

使つてゐる機種の性能が低いのか、段落のはじめに空白を入れる事が出来ません。ご了承ください

オリエント戦地

両手に下げられたスーパーのビニール袋。中には母から頼まれた野菜や卵が入つており、見た目に反してさほど重量は無い。

その中で帰りの近道という事で賑わっていた大通りから外れて薄暗い路地のほうへとむかつて行く。その通りから真っ直ぐ抜けたところにそれはあった。

——オリエント戦地。

今から大凡一千年前おおよそ。天使と悪魔による大規模な戦争が起こり、それの戦場としてここが使われ、現在まで大きな爪痕を残し、その戦争の被害の大きさを物語ついていた。

それは、遙か昔のピタゴラス派の人物と、デモクリス派の人物たちが争つたという説や本物の天使と悪魔による物だという説など、様々な説がある。

個人的な意見としてはピタゴラス派対デモクリス派の争いが一番怪しいと俺は踏んでいる。

その激しい荒れ具合、ところどころには大小関係なくいくつもの

クレーターが点々と存在していた。その他にも、途中まで崩れた柱。それにはところどころに綺麗な装飾が施されていた。

「ひどいものですねえ……」

観光名所とは呼べないほどに荒れ果てた土地に、一つの声が木霊する。

その声に強い引力を感じたのか、俺の顔は進行方向とは全く関係の無い方向。右斜め後ろへと向いた。

先ほどは崩れた建物の影になつて見えなかつたのだらう、そこに立っていた人物は崩れた建物を見上げていた。

だがしかし、その格好はあまりにもひどい物であつた。エナメル質の衣服は局部という局部しか隠されておらずに、綺麗に括れたウェストやスラリと伸びる両足は露出されたままであつた。

男の性といつもなのが、その女性に先ほどよりも強い引力があるようだ。田は見開いており凝視していると自分でもわかる。

「あ、別に嘗みの後、というわけでは無いですよ

誰も聞いてない。

寧ろ俺的には嘗み後であつたほうが嬉しかった。そんな事情も無いのにそんな格好をしているなんて変態の一文字しか浮かび上がらない。

「酷いつてこじがですか？」

「ええ、どちらにせよこの世界に生ける者によつてこじまで
の被害が出るのですから」

「でも風化などもあるでしょう？」

俺のその言葉を聞くと、彼女は黙り込んでしまった。この悲惨な光景を見ながら口を紡ぐだけ。その姿は戦没者に祈りを捧げているようになえた。

「あなたはどうちら派なんですか？」

唐突に彼女は口を開き俺へと疑問を投げかけた。

「わかりませんね、この世がなんであれどもいい事です
から」

「ふふつ」

俺の答えが可笑しかったのか、彼女は妖艶な笑みを浮かべる。

「世界はなに」とも数で表せる事ができるのですよ」

彼女は語り出す。

「カンタンな四則演算から複雑なアイソクタイン方程式までなものかも。それはまるでピタゴラスの言つていったことに当たはまります」

「そうですね……しかしそれでは世界の全てであるところひとつではないのです?」

彼女は先ほどとは違つた笑みを浮かべると少し考え込み始めた。

「そうですねえ……とかか些か私の言葉が足りなかつたですね」

彼女は一人で納得するとちこちこへ一つの咳払いをした。

数の世界

「よく思い出して見てください、牛乳などの内容量表記は数ですよ
ね？」

俺は肯定の意味を込めて首を縦に振る。

「そうするとです。人間の寿命や体温、エネルギーなどありとあら
ゆる物事は数が関わり、数が支配しています」

確かに考えてみればそうだ、物理学などにも必ずと言つていいほど
計算式を使つし、明るさや音の高低にも必ず数が使われている。

こつ言つた持論を展開するといふことは、彼女はピタゴラス派の人
間なのだろうか？

「あなたはピタゴラス派なのでですか？」

俺の問いに彼女は再び妖艶な笑みを浮かべる。

「いいえ、私はあなたと同じような人間ですよ

その笑みを浮かべたまま、彼女は月明かりに照らされながら答えた。

「そうなんですか？」

「はい、よく考えて見てくださいよ、確かに数は不变的な物かもしれませんが、物事の量を決める際の値の基準はあくまで私達人間が作り出したのですよ？」

なんというのだろうか、この人は凄い思考回路の持ち主である。ここまでしつかりした考えを持つた上で自分とは違った価値観の人を考えを理解できるのだから。

「凄いですね……」

「なにがですか？」

俺の漏らした言葉に、彼女は不思議そうに首をかしげたが、俺は「気にしないでください」と言つた。

突然俺の携帯電話が鳴りひびいた。

「ちゅうとすいません」

俺がそういうと彼女は一ヶコリと笑みを浮かべた。よく笑う人だな。そんな呑気な考えは電話の向こう側にいる人物によつて吹き飛ばされてしまう。

「はいもしも……」

『もしもじじやないわよ馬鹿ああ……』

その耳をつんざくような高音が大音量で鳴りひびいた。ハンズフリーにした訳でもないのに、彼女までも聞こえていたようだ。

今回ばかりはさすがの彼女も苦笑いをしていた。

『なんで湊君みなとは学校帰りでスーパーに寄るだけなのに生徒会で残つてたあたしよりも遅いわけ！？』

俺は携帯電話から耳を離しているというのと、通常の状態と同じようになってしまった。それ程までに電話の向こうの相手が怒り心頭なのだと察する。

耳を離したついでにメインディスプレイで時間を確認するとすでに七時となっていた。これから俺が帰つて飯を作るなんて事になってしまえば夕飯は八時を超えるだろう。

「うわわわー！」、「めん結衣！－す、すぐ帰るからーー！」

そのまま、結衣に電話を切られてしまう。

「じめんなさい…俺もつ帰ります…」

俺は彼女に何度も頭を下げながら家の方向に向けて走り出した。彼女はにこやかに笑みを浮かべると俺に手を降ってくれた。

あ、名前くらい聞いておくんだった。

崎川 結衣

家についたのは八時を五分ほどすぎた時間であった。今は玄関前で鍵を出そうとしているのだが、結衣の恐怖からか手がガクガクと震えているのが感じ取れた。

すぐに見つかった鍵。キーホルダーとしてつけている立派な黄色い眉毛を生やすペンギンがなんだかいつもより眉を顰ひそめるているような気がしてならなかつた。

ガチャリと重たい音を立てながらロックが解除される。左手に集中した荷物の重みでビニール袋が手に食い込むのだが、今はそんな事気にしていられない。

「た、ただいま……」

何故かいつもは脱ぎっぱなしであるはずの靴を綺麗に向きを揃えて整えた。

この短い廊下の左側に結衣がいるであろう居間に繋がる扉があるのだが、そこ個からは真っ黒なオーラが流れ出ていると雰囲気で感じ

取る。

これ程までにドアを開ける事に対しても恐怖感を抱いただらうか、否、一度もない。だが、開けない事にはこのやつから鳴り響くこの腹の虫が収まらない。

意を決して、ドアノブをしたに下げてから手前にグイッと扉を引く。気温差は無いはずなのに開けた途端に俺の体の体温が下がった気がする。

空気量は変わらないはずなのに、空気が重くなつた気がする。

体重が増えたわけでも無いのに、足取りが重くなつた気がする。

「結衣？」

その恐怖の根源である人物の名を呼びながら怯えた子犬ながらにふるえながら居間へと侵入する。

いつ、どこから出でてくるかもわからない、不思議な事に明かりのひとつ自宅で氣分はお化け屋敷にいるようだ。

「ち、崎川結衣さん？」
サキカワコイ

なぜか、今のどこにも結衣の姿は見当たらなかつた、電気がついていたからなのかなと思つたのだが、見当違いなようだ。

しかしだ……

俺の後方より、扉の空く音がする。それは俺の心臓を高鳴らせる要素としては十分すぎた。

「湊君？」

女性の声にしてはほんの低い声がする。掠れたような声にはあからさまな怒氣が含まれており俺の顔を振り向かせてはくれなかつた。

「ただいま戻りました……」

額から嫌な汗が流れ始め、口の中の水分が急激に蒸発する。

「他にいつ事な……ないの？」

無いの？の部分ではワザと声にドスを聞かせていた。格好悪くも俺の口からは短い悲鳴が漏れた。

「遅れて申し訳ありませんでしたあ……」

俺は結衣の方へと向き直り、顔を見るのは怖い為そのまましゃがみこんでフローリングの床に額を打ち付けるようにして下りました。

「やだなあ～家賃漬にしててくれるなりこよ

「いや、まてまて、それはお前があの時……

「あの時何だつて？」飯食べたくないなりこよ。

俺は知っている、彼女、崎川結衣の笑顔にはいくつかの意味があり
今回は、それが脅しをかける時の黒い笑顔だという事を。

静かな夜

結果として、彼女が払ははずだつた家賃を二ヶ月間無しにするという約束を、指紋入りの契約書を書くことで何とか彼女の怒りを收める事ができた。

別に俺が強制して「払え」と命令した物では無く、彼女から一方的に払つて来たからこれまでもらつていた物なのだ。

だからこれと言つて俺には何の不利益もない。寧ろこのまま結衣が家賃を払わないでいてくれた方が俺としてはすぐ助かるのだが……

午後九時を過ぎてしまったが俺達は結衣の手作りである牛丼を食した。長い間空腹だったからか、調子に乗つて三杯もお代わりしてしまつた。

まあ、その事でさらには結衣の機嫌が良くなつたからよかつたのだが。

それにしても、オリエント戦地にいたあの人は一体なにしていたんだろうか？あんな格好で歩いていたら注目を集めると思うのだが。

「お風呂上がつたよー」

「ん、解った」

結衣も風呂から上がった事だし、俺も風呂でさっぱりして明日の為に早めに寝るとしよう。

風呂から上がつても、いや湯船に浸かっていた時も何故か頭を過るのはあのエナメル質の服をきていた女性の事。

なんだか、知り合いというか親族がここで戦死していったかのような表情をしていた。それが似合うオリエント戦地。

何故か気になつて仕方がない。ひょっとしたら何かしら彼女に不信感を抱いているからここまで考えてしまつのだらうか。

胸の靄が晴れないまま、濡れていたはずの髪は生乾きの状態へとなつていた。既に結衣の姿はない。恐らく自室に居るのだらう。

そして、其の靄の根源にはどこかあの時の結衣と同じく雰囲気を感じ取つたからと言つのを俺が気づいていたと言つ事。

「やつぱり……俺はそつこつた事に巻き込まれる不運体質なのか……」

「…

自重気味に漏らした言葉に答えるものは居ない。聞こえてくるのは
精々自分の高鳴った心臓か静かな住宅街に響き渡る傍迷惑なバイク
のエンジン音だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0084y/>

奇跡の正しい使い方

2011年11月21日16時30分発行